# 象を撫でる

## ――佐藤創・太田仁志編『インドの公共サービス』

アジ研選書No.45、アジア経済研究所、2017年2月――

佐藤　創

「群盲象を撫づ」というインド亜大陸発祥と伝えられる寓話がある。目のみえない人たちが象の一部をそれぞれ触り、それがなんであるかを議論したところ、耳を触ったものは扇、足を撫でたものは柱、尾を握ったものは綱、牙を掴んだものは槍、鼻に触れたものは管などと主張し結論がでない、というお話である。議論のすえに象という答えにたどりつくというバージョンもあるらしいが、いずれにしても、一面しかみずに全体を理解したと考えることは危険であり対立を招くこと、あるいは、真実は一つというよりも多様な側面をもちうること、などを示す寓話として知られている。

その寓話発祥の地、インド亜大陸は、20世紀には経済後進地域となり、貧困の代名詞のようであったが、とくにその中心に位置するインド共和国は、近年、経済成長著しい。ここ数年では経済成長率で中国を超える年もあり、人口も近い将来中国を抜き去る見込みで、次なる世界経済の牽引役と期待する向きもある。その現状分析を行った文献も英文・和文で陸続と刊行されており、その表紙を眺めてみると、ITや高層ビルなどの経済成長を示す写真と、依然としてあまり変化のない貧困層の暮らしをクローズアップした写真を併せて使っているものが少なくない。そうしたいまだ混沌とした状況にどう論理的な説明を与えるかが重要な課題となっているということである。

実際、インドという巨象を全体として理解することが容易ではないことはもちろん、その様々な一側面をそれぞれ把握することもまた難しい。全体はその各部分を単に足しあげたものではなく、また各部分も全体を離れて存在しているわけではないからである。また、連邦を構成するそれぞれの州が面積、人口の双方の観点から他の地域であれば一つの国ほどの規模がある。さらに、言語や慣習という点でも地域ごとの違いは顕著である。紙幣には17もの言語でそれがいくらを表示するのかが示され、宗教はもちろん、それを反映した暦もまた異なるものが併存している。

そのようなインドの現状を示した分析が、巨象を全体としてあるいはそのある一部分を理解したつもりが、虚像を示したにすぎない、という結果に終わっている可能性はどんな研究にもつきまとう。所詮、どのような説得力ある説明も未来の研究によって反証されないかぎりでの暫定的な真実として受け入れられている仮説にすぎないということを差し引いても、インドの現状を把握し示すことは困難なのである。

もちろん、インドの現状およびその将来について理解しようと努めることは重要であると考えられ、したがって、その様々な側面を考察することの蓄積に、研究の営為がある。本書も、その一面についてのみでも光を当てることに貢献できればよいのではないか、という意図で編まれている。

その切り口として、本書は「公共サービス」というテーマを選択している。つまり、インド経済や社会を俯瞰し鳥瞰するというよりも、そのいわば足腰にかかわる分野に絞って光を当てることを目指している。もちろん、インドに関する農村の社会構造変化や貧困の研究、産業研究、マクロ経済研究など、先行研究は多数存在し、また教育や食糧問題など個々の政策分野に関する研究も蓄積されており、それらに依拠しつつ、「公共サービス」分野を横断的に取り上げている点で若干の独自性を考えたということである。公共サービスには人々の生活の基盤となるもの、中長期的な経済発展の礎となるような分野が少なくないと考えられることもこうしたお題目を考えたゆえんである。

ここでは公共サービスとは、基本的に、日常生活や社会生活を円滑に営むために必要な基本的な需要をみたすものと捉え、その提供主体は、おもに政府であることが多いが、官民連携や民間による提供も対象とした。公共サービスにおける民間の参加、民営化は世界的な潮流であり、その点、インドにおいてもどのような歴史的な変化があるかを明らかにすることにも努力した。公共サービスに含まれる典型的な分野は、教育、医療・保健、社会保障・年金、食糧、環境・公衆衛生、インフラ、電気・水道・ガ

スなどの公益事業、警察、防衛、争訟処理などである。これらのうち、本書では、食糧保障、医薬品、生活用水、都市ごみ、義務教育、乳幼児の保育、そして司法を各章で取り上げている。

個人的には、公共サービスという問題を考えた理由は、1年間ニューデリーにある大学の客員研究員として滞在していたときの経験が大きい。停電は日常茶飯事であろうことは知っていたが、実際に生活者となりこれを日々経験すると新たに気づくことも多い。たとえば、停電時間が長いと冷蔵庫にあった食料を捨てねばならない、ということに気が付いた。とりわけ暑い5月だったか、冷蔵庫に入れてあった牛乳は惨いことになっていた。また、停電のタイミングが悪いと蛇口から水をえることができず、洗濯機を使えないのみならず、トイレを流すこともできないという事態に遭遇した。一般に、ニューデリーの居住地域には上水道はきているのだが、24時間供給ではない。一日に数時間しか水の供給がないために、各建物には地下に貯水槽があり、これに水をため、その後に屋上にある大きなタンクに電動ポンプでくみ上げて水圧を得て建物内の蛇口から水がでるという仕組みなのである。そのため、停電で屋上タンクに水をくみ上げられなければ蛇口からは水はでない、ということになる。

ガスにしても、シリンダーが数週間で空になる。料理をしている途中でガスがなくなり、予備のガス・シリンダーにつなぎかえてくれるよう建物の管理を担当している者に伝えると、ガスを買いに行くというので、1時間ほどかかった。当然ながら、せっかく日本からのお土産としていただいたうどんを使った料理は残念な具合になってしまった。

医薬品の購入も当初はとまどったものである。お腹を下してなかなか症状がおさまらないので薬を買いに行くと、箱から出してある、しかも6つのカプセルで一つのシートとなっているものを、ハサミで3つに切ったらしい、2カプセルを渡され、これがよいと処方された。これでは本物かどうかわからないし、使用期限も使用法もわからないので、箱ごと欲しいと交渉したが、後に、貧困層が多いこともあり、こうした販売法は広く普及していることを知った。

ごみ処理なども戸惑うことが多く、外国人としてニューデリーという大都市にて相対的に裕福な暮らしをしていてすらこうした体験は枚挙にいとまがないくらいであるから、現地の膨大な貧困層の人々の日々の暮らしにおける苦労は推して知るべしであろう。はたして公共サービスがどういう状況にあるのか、改善してきているのか、問題は山積しているように観察された。こうした経験もまた公共サービスを検討してみたいと考えたきっかけとなっている。

ガルブレイスというケネディ政権時代に駐インド・アメリカ大使を務めたこともある高名な経済学者は、インドについて「機能する無政府状態」との評価を与えたことがある。その心は、政府がしっかりと役割を果たし仕事をしているとはいいがたいが、インドに生きる人々の個々の、あるいは様々な団体のエネルギーや創意によりインドは発展しているということだという[(1)]。

インドの公共サービスについて経験し、検討して考えたことは、一つには、ガルブレイスと自分を比肩することはおこがましいことこの上ないが、ガルブレイスも筆者も、インドという巨象を撫でる群盲の一人に過ぎなかろうということであり、インドについてなにを主張するかは、当然ながら、撫でた部位や撫で方にあると同時に、やはり触れて得た情報をどう評価し咀嚼するかという能力・努力にあるのだろうということである。また、少なくとも公共サービスについては、政府がきちんと機能してくれたほうがよい、ということも率直な感想である。とはいえ、インドでは、公共サービスの提供を充実させることがそう簡単ではないことはもちろん、その現状を把握することすらまた多大なエネルギーが必要だということもあらためて痛感した。巨象の表面積はあまりにも広いのである。本書が、一部位にとどまるとしても、インドの来し方行く末を推し測るに役立つような情報を少しでも提供できていることを願っている。

（さとう　はじめ／アジア経済研究所　南アジア研究グループ）

≪注≫

(1) “Interview / John Kenneth Galbraith,” *Outlook*, Vol. XLI, No.32（August 20, 2001）pp.46-47.